

今週の為替相場見通し(2021年9月6日)

総括表		注	先週の値動き		今週の予想レンジ
			レンジ	終値	
米ドル	(円)		109.59 ~ 110.42	109.69	109.20 ~ 110.70
ユーロ	(ドル)		1.1783 ~ 1.1909	1.1880	1.1750 ~ 1.2000
(1ユーロ=)	(円)		129.51 ~ 130.74	130.33	128.50 ~ 131.50
英ポンド	(ドル)		1.3732 ~ 1.3890	1.3861	1.3750 ~ 1.3900
(1英ポンド=)	(円)	*	150.95 ~ 152.30	152.11	151.00 ~ 153.00
豪ドル	(ドル)		0.7286 ~ 0.7477	0.7449	0.7300 ~ 0.7540
(1豪ドル=)	(円)	*	79.98 ~ 82.03	81.74	80.00 ~ 83.00

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

市場営業部 為替営業第二チーム 上遠野 暁洋

(1) 今週の予想レンジ: 109.20 ~ 110.70 円

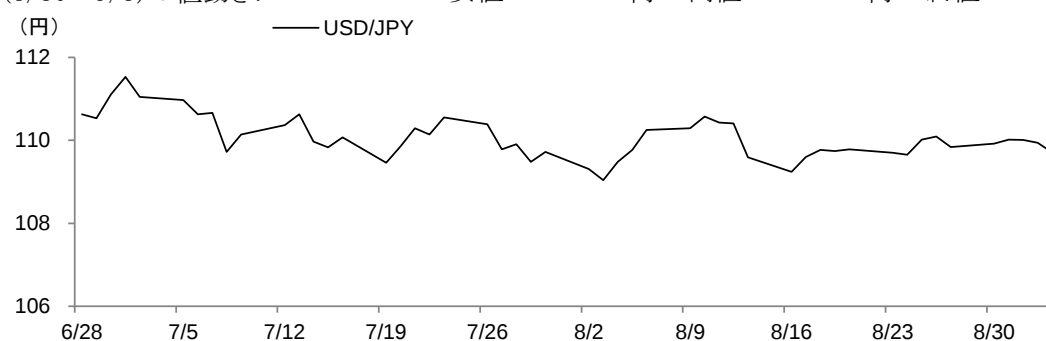
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円は、週央にかけて上昇するも週末雇用統計後に下落する展開。週初30日、109.86円でオープンしたドル/円は前週からのドル売りの流れも一服し、ロンドン休場で取引閑散の中、終日109円台後半での小幅レンジ推移。31日は109円台後半でもみ合った後、米経済指標の予想以上の悪化に一時週安値となる109.59円まで下落する場面があった。もっともその後は米金利上昇に伴うドル買いに110円台前半まで戻す動き。1日は月初における実需のドル買いや日経平均の堅調推移にサポートされ一時週高値110.42円まで上昇するも米8月ADP雇用統計の予想以上の悪化に109円台後半まで戻す展開に。2日は米8月雇用統計を翌日に控えて膠着感が強まり110円を挟んで上下10銭程度の小幅レンジで推移。3日、注目の米8月雇用統計は非農業部門雇用者数が+23.5万人と市場予想の+75.0万人を大きく下回る結果となり、直後109.63円まで下落。その後米金利の低下が一服しドル買い戻しの動きに109.95円まで反発するも戻りは限定的。クロス円の重さに再び売りが強まり下落するも週安値109.59円を下値に反発。109.69円まで小幅に戻り越週。

今週のドル/円については底堅い展開を予想。先週注目された米8月雇用統計は非農業部門雇用者数が市場予想を大きく下回る結果となり9月FOMCにおけるテーパリング着手への期待感が剥落し、ドル売りが強まる場面があった。もっとも、飲食業中心に雇用者数が低調となりデルタ株拡大による経済回復の減速感が改めて意識されたものの、今後ブースターを含めワクチン接種の進捗に鑑みれば短期要因とも捉えられるほか、失業率、および平均時給の良化もあり一方的なドル売りトレンドとはなりにくいものと考え。週内FRB高官の発言機会が相次ぐが、引き続き年内テーパリング着手という大味のスタンスに変更なかりせば、堅調な米金利にサポートされつつドル/円は底堅い展開になるものと予想。但し、今週は週後半ECB政策理事会を予定しており、ここ最近のECB当局者による相次ぐタカ派発言を踏まえPEPPの買い入れペース減額への憶測が急速に高まる中でユーロは強含む展開が予想され、ドルインデックスの下押し感も相まってドル上昇が阻まれる可能性には留意したい。なお、先週末は菅総理が今月末の自民党総裁選に出馬しない方針を示したことで、次期総裁を巡る思惑報道が交錯するも足元コロナ対応や財政拡張、金融緩和スタンスに影響を与えるものではなく影響は極めて限定的か。今週の主な経済指標として、7日(火)中国8月貿易収支、8日(水)日2Q GDP(確報)、米ページブック、9日(木)ECB政策理事会、10日(金)米8月PPIの発表などを予定。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(8/30~9/3)の値動き: 安値 109.59 円 高値 110.42 円 終値 109.69 円



2. ユーロ

市場営業部 為替営業第二チーム 山口 朋子

(1) 今週の予想レンジ: 1.1750 ~ 1.2000 128.50 ~ 131.50 円

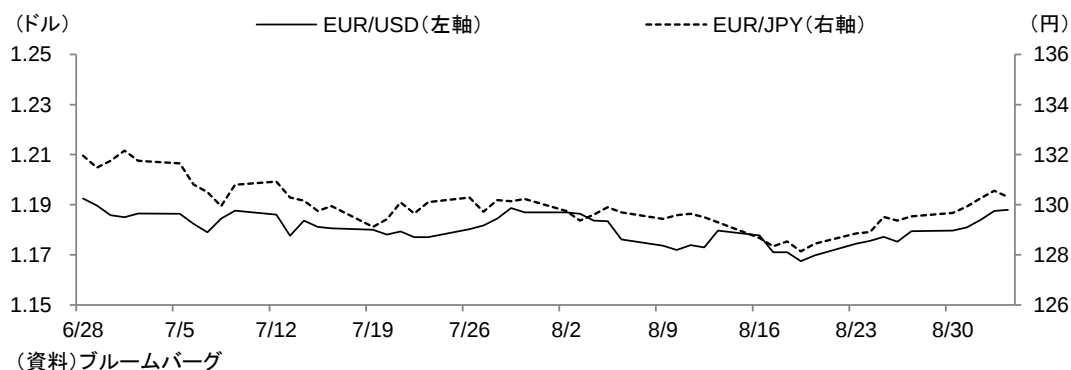
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドル相場は週後半にかけて大きく上昇する展開。週初30日ユーロ/ドルは1.18近辺、ユーロ/円は129円台後半と週安値圏でオープン。27日にパウエルFRB議長がジャクソンホールシンポジウムにてハト派な発言をしたことで週初からドル売りが進み、ユーロ/ドルは1.18台前半まで上昇。31日に発表されたユーロ圏8月HICP速報値の市場予想比上振れしたことやホルツマンオーストリア中銀総裁の「ECBがコロナ危機対策削減を考える位置にある」と発言したことを背景とした独金利が上昇、ユーロ/ドルは1.18半ば、ユーロ/円は130円台へ上昇。ただし、その後は月末のリバランス取引に絡むドル需要が高まるとユーロ/ドルは再び1.17台へと下落。1日以降はユーロ買いが加速した。ヴァイトマン独連銀総裁のECBは過度のインフレのリスクを無視すべきでないとの発言、さらに弱い米経済指標を背景に1日にユーロ/ドルは再び1.18台に上昇。2日は米雇用統計待ちの様子見ムードが広がるも堅調な株式市場を背景にクロス円が上昇し、ユーロ/ドルも堅調に推移。3日に菅首相の総裁選不出馬報道を受け日経平均が大きく上昇すると、ユーロ/円は7月中旬以来の130.74円に上昇した。発表された仏・ユーロ圏サービスPMIはやや速報値からは下振れも、依然高水準で、反応は限定的となった。その後、発表された米8月雇用統計で雇用の減速が確認されると、米国のテーパリングを巡る動きは11月以降に先送りされる公算が高まった。市場はドル売りで反応し、ユーロ/ドルは1.1909と週高値を付けた。しかし、1.19台からは機関投資家からのユーロ売りが持ち込まれると、ユーロ/ドルは1.18台後半、ユーロ/円は130円台前半で越週した。

今週のユーロ相場は、底堅い展開を予想。注目は9日(木)のECBの金融政策発表とその後のラガルドECB総裁会見に集まっている。ECBでは7-9月期に加速したパンデミック緊急購入プログラム(PEPP)の債券買い入れペースを10-12月期に減速させるかが注目される。ECBのタカ派で知られているメンバーだけでなく、ラガルドECB総裁も「ユーロ圏はコロナ禍から回復しつつあり、大規模な支援策ではなく、セクターを絞った外科的な措置が必要」と発言しており、市場は10-12月期のペース減速がある程度織り込まれつつある。米国は先週末発表された8月の雇用統計が予想比弱めの結果となったことで早期テーパリングへの期待が後退しており、今会合でECBがテーパリングの終了時期についての具体的なアナウンスをするとユーロ相場は続伸すると予想。ただし、PEPPはコロナ感染拡大を受けた危機対策であり、ECBは従来の資産買い入れプログラム(APP)を継続させる。フォワードガイダンスの下で利上げ開始が相当先との見方が浸透しているため、大幅な独金利上昇やユーロ高にはつながりにくいだろう。また、世界的なデルタ株の感染拡大は続いており、相場がリスクオフに転じた際の先週からのユーロ買いの巻き戻しにも注意をしたい。注目の経済指標は6日(月)の独7月製造業受注、7日(火)のユーロ圏4-6月期GDP確報値、9日(木)独7月貿易収支。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(8/30~9/3)の値動き: (対ドル) 安値 1.1783 高値 1.1909 終値 1.1880
(対円) 安値 129.51 高値 130.74 終値 130.33



3. 英ポンド

欧州資金部 本多 秀俊

(1) 今週の予想レンジ: 1.3750 ~ 1.3900 151.00 ~ 153.00 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は、対ドル、対円で小幅ながらほぼ一方的な上昇。対ユーロでは、下押しが先行したものの、週明け前に反発し、(週を振り返って)概ね横ばいに終わった。ただし、対ドル、対円での堅調は、ドル、円の軟調の裏返しと思われ、対ユーロでの下押し、反発もユーロ側の値動きで、英要因による値動きはほとんど読み取れなかった。米8月雇用統計待ちの動意に乏しい地合で、まず進んだのは、米連銀パウエル議長講演(27日)を受けたドル安の継続。同講演の「資産購入規模縮小(テーパリング)は利上げと直接の関係はなく、(テーパリング開始以上に)より厳格な要件の達成を必要とする」との部分でドル売り要因視された模様。31日から1日に掛けての円の乱高下は、米長期金利の上下動を忠実に反映(米長期金利上昇に円売り、同低下に円買い)していた。ただ、米長期金利については、米経済指標(31日の米8月消費者信頼感指数や1日の米8月ADP雇用統計など)の下振れに低下したのは理解できたものの、そもそも金利が上昇基調をたどった理由はよくわからなかった(後述)。並行したユーロ堅調は、31日のユーロ圏8月CPI暫定値の上振れに前後して、ビルワッドガロー仏中銀総裁(30日)、クノット・オランダ中銀総裁やホルツマン・オーストリア中銀総裁(31日)、ワイトマン独連銀総裁(1日)などの欧州中銀首脳が、相次いでインフレに対する強い警戒感やパンデミック緊急購入プログラム(PEPP)の早期縮小を示唆したことが材料視された。週明けにかけては、注目された3日発表の米8月雇用統計の非農業部門雇用者数が大幅に下振れたことで、ドルは再び下げ足を強めた。ただし、同日発表されたユーロ圏7月小売売上高が市場予想を明確に下振れたことなどを嫌気して、前後してユーロも頭打ちとなった。

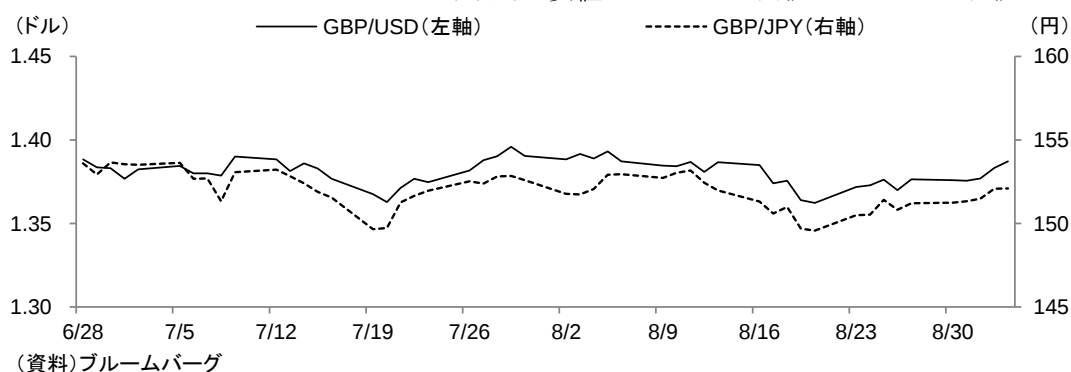
今週の英ポンド相場は、頭打ちから軟調推移を予想。8月を振り返ると、ポンドが、英固有の要因を理由に、主体的な値動きを見せた局面はほとんど見られなかった。通貨市場の関心を集めたのは、専ら米連銀金融政策動向であり、月末のパウエル議長講演だった。敢えて挙げるなら、アフガン情勢を警戒したリスク回避の円買い/新興市場通貨売り局面が見られたり、月末月初をまたいで欧州中銀のPEPP縮小が俄かに注目を集めたりしたが、英国発の要因が注目されることはほとんどなかった。6日以降、英議会が夏休み明けとなり、英政局がなんらかの材料を提供する可能性は考えられなくはないものの、目先のポンド反落を予想するのは、ドルの反発を見込むからに過ぎない。先週(31日~1日)観察された米長期金利の不思議な上昇基調は、3日の米8月雇用統計後にも観察された。非農業部門雇用者数の大幅下振れに、発表直後急落した米長期金利だったが、ほどなく急反発してしまった。同時に発表され、予想を明確に上振れた米8月平均賃金に反応した可能性は考えられたが、だとすると、この間、通貨市場がドルを売り込むのを他所に、債券市場は、米インフレ上昇を懸念していた可能性がある。こうした乖離が観察された局面では、要人発言などに急激な反応を示す通貨市場よりも、物価動向などを丁寧に精査する債券市場の反応に、いずれ金融市場全体の潮流が収束していく可能性が高いのではないかと。また、欧州中銀がPEPPの早期縮小に動き出した可能性は高いものの、同銀の場合、(米連銀と異なり)あくまでも緊急時の対応であるPEPPのテーパリングは、従来の資産購入策(APP)に取って代わられるだけの可能性が高い。足下物価動向などに鑑みても、欧州中銀利上げ開始は、米連銀のそれに明確に遅れるものと見られているが、パウエルFRB議長の「テーパリングと利上げとを切り離して考える」との発言を、利上げ先送りと読んでドルを売った市場が、欧州中銀のPEPP縮小観測にユーロ買いで飛びつく反応には、些かの無理が感じられ、長続きしない可能性が高いように思われる。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(8/30~9/3)の値動き:

(対ドル) 安値 1.3732 高値 1.3890 終値 1.3861

(対円) 安値 150.95 高値 152.30 終値 152.11



4. 豪ドル

アジア・オセアニア資金部 シドニー室 川口 志保

(1) 今週の予想レンジ: 0.7300 ~ 0.7540 80.00 ~ 83.00 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週は1週間を通し豪ドルは0.72台から0.74台へ大きく上昇。30日の豪ドルは月末に向けて実需やポジション調整のフローが中心となり、0.73を挟んだ狭いレンジで推移。先週末のパウエルFRB議長の鳩派寄りの発言を背景としたドル売りの流れを引き継いで0.73台前半でスタート。1日を通し0.73ちょうどを中心に振幅した。NY時間ではS&Pとナスダック総合が再び最高値を更新。しかし豪ドルは上値が重く0.73を割れてNY引けとなった。31日の豪ドルは概ね0.73台前半での推移となった。朝方AUD/NZDが1.04近辺にあったオプションピンを抜け、一気に1.0350を割りこむ展開となったものの豪ドルへの反応は限定的。その後はモリソン首相が200万本以上のワクチンが豪州内で供給され、今週シンガポールからpfizerが50万本新たに届くと述べ、豪州の経済活動が再開に向かっていている事をアピールしたコメントにも支えられ豪ドルは0.7340近辺まで上昇した。米国市場では米株が下落し、米国10年債金利が上昇すると、やや値を落としたが0.73台を維持して引けた。9月1日は概ね0.73台前半での推移した後、NY時間では0.73台後半まで上昇。豪2Q GDPでは在庫減少にも関わらず売り上げ、賃金収入等がプラスとなり市場予想を上回った。もしマイナスであればRBAによる9月からのテーパリングが先延ばしされるのではとの見方が出ていただけに、安堵感から豪ドルが支えられた。但しこちらはロックダウン前の数字である為、先行きはロックダウンの期間に左右される。その後の米ADP雇用統計では人材確保が困難な状況を背景に2か月連続で予想を下回った。これを受けたドル売りの流れから豪ドルは0.7385近辺まで上昇。この他、新型コロナの経口治療薬の治験が進展している事もセンチメントを支えた。2日はドル売りを背景に0.73台後半から0.74台へ上昇。豪7月貿易収支は海外のLNGや一般炭の需要に加え、鉄鉱石価格が上昇した背景もあり、予想・前回値を共に上回った。また、前日発表となった軟調なADP雇用統計を背景に米8月雇用統計が弱いとの見方からドル売りが継続し、豪ドルは支えられ0.74台のせ。またNY時間ではS&P500が最高値を更新した事も上昇を後押しした。3日は米8月雇用統計が予想を大幅に下回り、デルタ株感染拡大による景気回復ペース減速が警戒されドル売りが先行。豪ドルは直近高値を0.7478まで更新した。

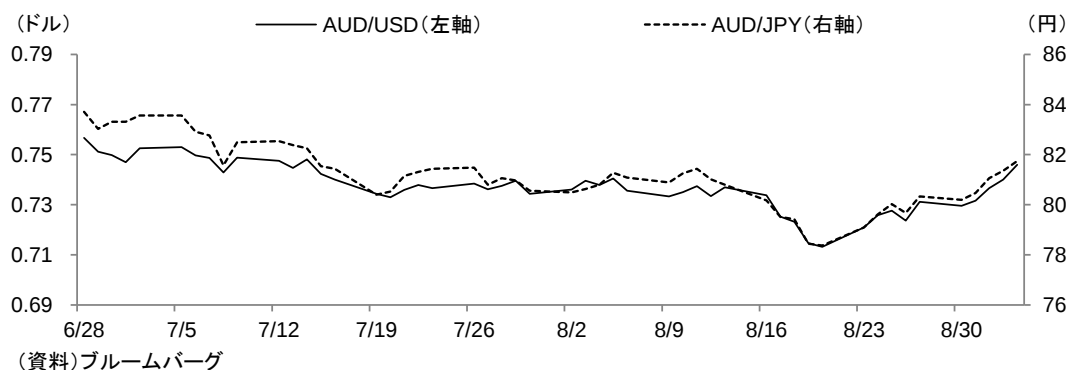
今週の豪ドルは引き続き0.74台定着となるか、上昇トレンドを維持できるかが焦点となる。注目イベントは7日(火)に豪9月RBA理事会、中国8月貿易収支、8日(水)にデベールRBA副総裁のスピーチ、9日(木)に米ベージュブック等が予定されている。今週7日(火)の月次RBA会合に関しては一部豪州地場銀行がRBAは理事会でテーパリング延期を発表するとの予想を発表。その他の選択肢としてはテーパリングを進めつつも次回のレビューを2月まで延期するのではとの見方を示している。個人的にはロックダウン解除に向けてのワクチン接種が進んでいる事や、9月に入りRBAから方針変更のシグナルが出ておらず、市場との対話をしていない事から、今回は債券買い入れ額の縮小を進めながらも適宜柔軟にレビューをしていく可能性が高いとみている。米国も先週末発表された期待外れの雇用統計後、FRBが9月にテーパリングを発表するとの見方が後退している。両国の金融スタンスに及ぼす各ファクターに引き続き注目が集まる。まずは火曜日、RBAが買い入れ縮小計画を堅持する方針に変化がないか確認したい。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(8/30~9/3)の値動き:

(対ドル) 安値 0.7286 高値 0.7477 終値 0.7449

(対円) 安値 79.98 高値 82.03 終値 81.74



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。